



生物学

国内予選、国内本選、代表選抜試験を経て、国際生物学オリンピックの日本代表が選ばれる。参加者数でいえば、3千人超の国内予選↓80人の国内本選↓12人の代表選抜試験↓最終的に代表4人十次点者2人と絞り込まれていく。

これを見れば、国内予選を突破して国内本選に参加

すること自体が大変狭き門であることが一目瞭然である。

なお、国内予選・国内本選には高校3年生以上も多数参加しており、12人の代表選抜試験に進むには高校2年生以下が必須条件である。

本選の現場を見てみると、受験科目としての生物の勉強が得意な生徒たちというより

も、素朴に心から「生物が好き」と言えるだけの思いを持つ生徒たちの割合が高いように思う。つまり、正答が用意された受験勉強の訓練で満足することなく、日頃から生物(学)に関して自ら興味を持ち、追究していくことが大事なのではないか、そしてその延長として本選出場があるのではないかと思えるのである。

る。

ただし、特別な環境で特別な対策を練らないと本選に行けないということはなく、日頃から主体的に追究していく姿勢があれば良いのだろう。

実際、国内予選を突破するために特別な対策が必要かと思いきや、どうやら生徒たちは高校生物の資料集などで勉強

することが多いようだ。つまり、国際大会の標準教科書である「キャンベル生物学」(1500^{ページ}超)を読破しないと本選に行けないということではない。また、高校で十分に生物学を勉強する機会がなくとも自学自習で本選まで出場する生徒もいる。

国際大会で活躍するには、これまで述べた資質に加え、

また異なる要素も加わるよう

だ。国際大会では、開催国の常識や習慣に従う必要がある。水道水が飲めない国は多く、時間を守らない国もある。いわゆる「開催国の洗礼」にもまれながら、それでも世界中の代表選手と交流し、仲間になるだけのたくましさが必要とされるだろう。

求められるだろう。

日頃から主体的に追究する姿勢を

い」という大会側の意思の表れなのだが、実際にどう臨むかは

世界中から集まった代表選手は、いわばそれぞれの国で頂点に立った生徒たちである。それを受け、特にここ数年の国際大会の開会式では、議長が「この場にいる時点で、君たちは既に勝者なのだ」と宣言するのが恒例となっている。これは「あとは存分に国際交流を楽しみ、他国の友人をたくさんつくってくださ

国によってさまざまである。日本代表選手の場合、世界中から代表選手が集まる一種独特な高揚感にのまれることなく、むしろこの雰囲気をも十分に楽しみ、普段通りの力を発揮できるとよいのだろう。

(笹川昇・国際生物学オリンピック日本委員会副委員長・東海大学教授)